藝術研究所
研究調査報告書

7

2008

大阪芸術大学藝術研究所

ご　挨　拶

大阪芸術大学藝術研究所

所長　山縣　　熙

『研究成果報告』第７号をお届けいたします。

この報告書は、平成19年度の公募の中より藝術研究所運営委員会が認めた補助費による研究調査の成果をまとめたものです。

本学に於ける研究調査活動が、より活性化することを願い、来年度以降も研究調査補助の活動を継続してまいります。特に綜合芸術大学の特性を生かした、領域を超えた共同研究調査は、大いに歓迎いたします。

またこの報告書に対する批評･感想などお気付きになった点は当研究所宛にご連絡下さい。

藝術研究所研究調査完結研究課題一覧表

（平成 19 年）

研究ディレクター	研　　究　　課　　題	頁　数
太　田　米　男（映　　像）	玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト（玩具映画プロジェクト）5　映画保存と活用に関して２（国産動画を中心に）	5
藪　　亨（教養課程）	「文化の学としての出版・編集論構築のための基礎的研究」	7
山　縣　　熙（文　　芸）	ライカと写真行為の革新 ― 写真の可能性について	9
山　縣　　熙（文　　芸）	終戦直後の〈カストリ雑誌〉の総合的研究	11

※各氏名の肩書きは、研究調査補助費申請書申請時の役職で掲載しています。

玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト（玩具映画プロジェクト）5

映画保存と活用に関して2（国産動画を中心に）

研究年度・期間：平成19年度

研究ディレクター：太田　米男（映像学科　教授）

共同研究者：中島　貞夫（映像学科　教授）　豊原　正智（芸術計画学科 教授）　坂本　曠一（音楽教育学科　教授）　犬伏　雅一（芸術計画学科 教授）　吉川　幸夫（映像学科　教授）
志村　哲（音楽学科 准教授）　遠藤　賢治（キャラクター造形学科 教授）　宮島　正弘（映像学科 客員教授）

学外共同研究者：松本　夏樹（芸術計画学科 非常勤講師）　小山　帥人（映像学科 非常勤講師）　安井　喜雄（プラネット映画資料図書館代表）　上倉　庸敬（大阪大学文学部 教授）　石原　香絵（東京国立近代美術館フィルムセンター）
森脇　清隆（京都府京都文化博物館学芸課 主任学芸員）　藤岡　幹嗣　須佐見　成（㈱IMAGICAウエストフィルム事業部 常務取締役・部長）　ジョアン・R・バナディ（ロチェスター大学Japanese & Film 准教授）

今年度は、第一のテーマとして、国産動画の保存と活用を中心とした。5月に本学において「日本アニメーション学会」が開催され、それを機に、玩具映画コレクションの内の国産動画群を整理し、検索システムによって、これまでのすべての動画作品を鑑賞して頂こうと計画した。しかし、学会には間に合わず、従来の本学博物館の検索システムとビデオ映写での作品集を見ていただくに留まった。最初の機会を逸したが、今年度も、研究成果を得ることができたので、以下報告する。

①　4月に、国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAF）東京会議が、東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて開催され、本プロジェクトについて発表する機会を与えられた。FIAFは1939年に、戦争から映画フィルムを守ろうという意図で設立された非営利団体で、70年以上の歴史を持ち、世界で150ほどの団体が加盟し、映画保存や復元に関しての規範を示している。今回の会議は、「短命に終わった映画規格」をテーマとしており、玩具映画やナイトレート・フィルムは廃れたが35㎜フィルムを使用していたため、現在も復元が可能であり、フィルム保存を提唱する発表となった。70～80年前のナイトレート・フィルムの復元プロジェクトとして評価を得ると共に、各国の初期映画、例えばアメリカは西部劇、フランスはSF、イタリアは史劇、イギリスはドキュメンタリーというように、玩具映画の映像によって日本の初期映画には時代劇映画があることを印象付けることになった。この発表により、本プロジェクトの意義を広く知らせ、理解していただけたことは大きな成果であった。

②　従来からの映画の収集と復元に関しては、新しい協力者も増え、順次復元を行ってコレクションを増やしているが、費用の問題もあり、一時借りのものを優先し、独自で入手したものは、次年度に残している。復元できた主なものには、沢田正二郎の「月形半平太」（連合映画芸術家協会）や「南京街」というアメリカの実写とアニメの合成映画があり、未復元のものと

して「関東大震災、翌日の記録」や尾上松之助の「燃える渦巻」など貴重な映像があり、16㎜フィルムはすべて手をつけていない。

③　9月には、昨年に続き、本プロジェクト提案の「映画の復元と保存に関するワークショップ」を開催した。国立フィルムセンターや京都文化博物館、フィルム会社や現像所の協力を得て、新しく開館した神戸映画資料館と大阪のIMAGICAウエストで開催した。神戸での講義、大阪での現場研修という形で3日間（参加が多く、1日追加し4日間）のワークショップであったが、現像所での専門技術研修という人材育成を目的としたが、映画会社の従業者や博物館の学芸員、映画保存を研究している学者など、専門家の参加が多く、中にはすでに海外で復元を学んでいる留学生も参加してくれ、意義深い情報交流の場となった。「映画復元や保存が欧米から後進にあるとは言え、決して技術が劣っているのではなく、映画に対する文化意識の差、延いては映画保存の関心の低さに原因がある」というのが参加者の共通の認識であった。「日本映画を守りたい」という熱意を持った人たちの参加によって、今後情報交換やネットワークを構築、映画復元の専門家同士の連携や協力によって、本プロジェクトの重要な戦力となるに違いない。今後もワークショップを継続したいと考えている。

④　11月には、本プロジェクトで復元した17.5㎜という特殊規格のフィルム「祇園の山鉾」を京都の祇園会館での一般公開の中で上映する機会を得た。本プロジェクトでの初めての一般公開であり、意義深い催しとなったが、祇園祭山鉾連合会の協力により、山鉾の巡行順や工事中の看板などから、このフィルムが大正2年（1913年）のもの、95年前のフィルムと確認できた。ナイトレートのフィルムであり、日本最古フィルムの一本ということで、貴重な財産ということになる。

⑤　今後の展開として、学内では、芸大テレビでの公開。ネット配信によって、学外にも玩具映画を紹介する。また、2008年は京都映画祭（復元映画祭）もあり、今後も積極的に、玩具映画の活用を進めて行きたいと考えている。

「文化の学としての出版・編集論構築のための基礎的研究」

研究年度・期間：平成19年度

研究ディレクター：藪　亨（教養課程　教授）

共同研究者：山縣　熙（文芸学科　教授）　長谷川郁夫（文芸学科　教授）　田中　敏雄（教養課程　教授）　武谷なおみ（文芸学科　教授）　阪井　敏夫（文芸学科　教授）
山田　兼士（文芸学科　教授）　豊原　正智（芸術計画学科　教授）　笹谷　純雄（文芸学科　准教授）　出口　逸平（文芸学科　准教授）

学外共同研究者：石塚　純一（札幌大学文化学部　教授）　川上　隆志（専修大学文学部　准教授）

研究補助者：福江　泰太（フリー編集者）

近年の傾向として、日本文学学科の文芸学化を反映してか、いくつもの大学に出版また編集に関する講座が設けられるようになったが、ジャーナリズム･情報学の一環、あるいは文学史･文化史講座の一部として扱われ、その問題の重要性にも拘わらず、現在のところ、各講師の経験、見聞、またその視野に捉えられた限りの問題を講ずるものにすぎないのが現状といえる。出版･編集は学問としては未開拓の領域に留まっている。編集・制作の技術をプラクティカルに教授することはそれなりに意義のあることと考えられるが、専門学校ではない大学という場においては、技術教育だけで十分とはいえない。それを支える理念構築（のための第一歩）へのアプローチが急がれる。

とはいえ、そこにはさまざまなテーマが茫漠と想起されるばかりである。そこで、まずは「書物は一個の芸術作品である。つまり、一個の物体にすぎないが、品性を具え、特殊な思想の刻印を打たれた物体、また意志的な見事な秩序を目指した高貴な意図の存在を暗示する一個の物体である」（「書物および稿本について」）というポール・ヴァレリーの言葉を手懸かりとして、理想の書物を実在化させる編集・出版という機能を追求した。

【A】本文（テクスト）について……編集

【B】本文の器としての書物について……出版

それぞれに対しての１）歴史的なアプローチ、２）文化面からのアプローチ、３）創造性の観点によるアプローチ、を複合的に試みた。

例として、

１）については、

・古事記など口誦（声）から写本（文字）への移行過程に「編集」はどのように機能したかを考察した。

・グーテンベルクの聖書印刷を取り上げ、「思想の刻印」といったテキスト発生の初源的な問

題から【A】信頼すべきテキストの成立を目指すための「意志的な見事な秩序」としての、校正、校閲、索引の役割までを問うことを試みた。

2）については、グーテンベルク以降、複製技術による書物がどのように文化を先導したか、大量消費、マス・メディアの時代において本とは何か、を問うことに着手した。

ここでは時代を読む力とされる編集における「企画」の意味、そのあり方が対象とされた。

また、【B】の観点からは「高貴な意図」としてデザイン・装本の問題が浮かんでくる。ウィリアム・モリスの仕事が新たな観点から問うことを試みた。

3）については、文芸作品成立に関わる編集のはたらきについて考察した。

繰り返しになるが、近代においては洋の東西を問わず、内面からの、また多くは外側からの編集機能の介在なくして、作品は成立しないと考えられるからである。

編集者としてのアンドレ・ジッド（仏）、エズラ・パウンド（英）ら、二十世紀文学の出現に立ち会った内外の編集者･出版人についての研究をスタートさせた。編集者の眼による文学作品の読解を試みた。

上記の通り、テーマは多岐に亘り、とりあえずは試み、問題提起のための研究ではあるが、文芸学科のみならず、他学科の関連講座担当者との連携、また学外研究員の協力を得て研究会を開催し、各自のテーマについて報告し論議した。

そして本年度の研究成果に関して、以下の個別研究テーマに基づいて、研究報告書を作成した。

1、山縣　　熙　・出版・編集の原理論について
2、長谷川郁夫　・出版・編集の研究・調査
3、藪　　亨　・ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスでの出版・編集について
4、田中　敏雄　・近世における画譜の出版・編集について
5、武谷なおみ　・出版・編集とイタリア文学の関係
6、山田　兼士　・詩集論の出版・編集について
7、豊原　正智　・岩波写真文庫の編集について
8、笹谷　純雄　・出版・編集と美術書の関係
9、出口　逸平　・雑誌『演劇評論』の出版・編集について
10、石塚　純一　・編集者としての山口昌男について
11、川上　隆志　・編集・日本文化史に関する研究・調査
12、福江　泰太　・編集者の視座からの書誌学研究の可能性について

ライカと写真行為の革新 ― 写真の可能性について

研究年度・期間：平成 19 年度

研究ディレクター：山 縣　　熙
（文芸学科　教授）

共同研究者：師岡　清高　　犬伏　雅一　　森川　　潔
（写真学科　教授）　（芸術計画学科　准教授）　（写真学科 准教授）

学外共同研究者：平木　　収
（九州産業大学芸術学部
写真学科　教授）

ライカの登場によって、写真行為がどのように変わったのかを問うことが本研究の一つの基本テーマである。まずもっとも妥当なアプローチはライカの機能を徹底的に洗い出して、それ以前のカメラとの差異を明確にすることである。しかし、写真史の常識的な知識をもってすればこれ自体はそれほど厄介な問題ではない。問題は、カメラの近傍空間に視野を限定されることなく、カメラが布置されうる多様な言説空間を考慮してライカという道具を解明することになる。もちろん「多様な」を字義どおりに遂行することは、困難であるから、限定的な視座の設定が不可欠である。今年度は、近代的なカメラの前身である camera obscura から、ライカに至る過程で、この装置を扱う人間の側にどのような事態が生じさせたのかについて研究を行った。

カメラ・オブスクーラが一つの道具である限り、ハイデガーのいう「道具連関」の意味で、カメラは、人間が内的に組み込まれた一つの意味のネットワークに収まる。この意味のネットワークの結び目に位置する行為者たる身体を持つ人間にカメラは何を惹起するのか、特にその意味、これを歴史的に遡及しながら考察した。アル＝ハゼンに起点を持つカメラ・オブスクーラが布置していた言説空間をまず検討した。グローステストによる神学的（・数学的）「光の形而上学」が、宇宙の数学化を遂行することによってブルネレスキのフィレンツェにおける遠近法実験につながるが、この過程で自然魔術性をおそらく残しつつも、そこからの離脱の線として、プロト・幾何光学的なプロト・カメラ・オブスクーラ像が生成する。これはハイデガーの言をまた引くならばまさに「世界像」の成立の端緒である。遠近法の原理的成立は、単眼視によって身体を初めて明確に光学装置に巻き込む。これが、ドキュメントのレベルで明確化にするものとしてデッラ・ポルタの『自然魔術』の記述をラテン語テクストについて検討した。

ここで明らかになるのは、遠近法に内在する原理的な「世界像」の発動は、字義どおりの camera obscura（暗い部屋）のうちに立つ像を眺める主体には未だ起こらない。歴史的時間と議論を圧縮していうならば、ファインダーを肉眼に接触させるシステムによって、つまりライカ式のシステムによってはじめて遠近法に理論的に内在する人間の世界像の原点としての位置

が、装置的に確保されたといえる。この確認の下に、次のステップの考察を展開する。

1）本研究遂行の上で基本となる、「中川一夫ライカコレクション」の内、文献については、6月末に集中的に梱包を開封し、書籍の分類を実施した。その上で、地下収蔵庫に確保されているコレクション整理収納スペースに移動を完了した。年度内に、目録を完成させるべく鋭意努力を重ね多くの時間を割いた。同コレクションには当然ライカ関連の文献が多数含まれているが、中川一夫氏は研究者という立場で収集されてきたわけではないため、本研究にとって必要と思われるライカ関連文献、ライカ研究文献が不足している。これらを洗い出して、予算の許す範囲で関連文献を購入し文献一覧を作成する作業を次年度内に完成させたい。

2）次にライカという斬新な写真装置が、この装置に第一次的に関わる、撮影者、写真作品さらに観者をどのように変容させたのか、さらに、これらの要素と有機的な表裏を形成する写真環境とでも呼ぶべき写真産業、マスメディア、展示空間などがどのように相関的に変容したのかを明らかにすることにある。このような問題設定から導き出される一つの重要なケーススタディー的作業は、本学所蔵の世界的にみても貴重なカルティエ＝ブレッソン・コレクションを活用する研究である。ライカという写真装置をブレッソンの作品と関連付けて具体的に考察する。この際、本学が博物館に寄贈を受け収蔵した「中川一夫ライカコレクション」の活用が、本研究の枢要なエレメントとなる。両コレクションの連携によって、すなわち、実際に、カルティエ＝ブレッソンの写真作品を年代別に調査し、その年代に製造されたライカボディー及びレンズをなぞらえて行く事で、カルティエ＝ブレッソンの一連の写真行為の具体相を見極めることで、上記した課題の解決に一つの筋道をつけることが可能となる。これが次年度の大きな課題となるわけだが、そのための準備作業として、本年度はライカボディー本体からレンズ、各種アクセサリーに至るまで中川一夫全ライカコレクションの精査と分類を遂行する事を行った。この作業を引き受けて、ライカのメカニズムの進展（進化）が、撮影者―とりわけ主たる参照項としてはカルティエ＝ブレッソン―における、ライカという装置と撮影者の関係、representationとしての写真行為の変動を精査し、ライカのもたらしたトータルな表現性の推移とその独得な描写性の謎を明らかにして行きたい。

終戦直後の〈カストリ雑誌〉の総合的研究

研究年度・期間：平成19年度

研究ディレクター：山 縣　熙
（文芸学科　教授）

共同研究者：松井　桂三（デザイン学科 教授）　藪　亨（教養課程　教授）　田中　敏雄（教養課程　教授）　相羽　秋夫（芸術計画学科　教授）　長谷川郁夫（文芸学科　教授）
豊原　正智（芸術計画学科　教授）　井関　和代（工芸学科　教授）　月溪　恒子（音楽学科　教授）　出口　逸平（文芸学科 准教授）

第二次大戦後の飢えと混乱の時代には、「カストリ雑誌」と称された大衆娯楽雑誌が、出版の自由に乗じて巷に約千種類も出現し、大衆文化の新しい領域を開いている。これらの雑誌の特徴のひとつは、直接に性風俗を取り扱っているところにあり、著名なそしてまた後によく知られることになる文芸作家や挿絵画家も性風俗をモチーフにした本文や挿絵・漫画をしばしば掲載している。本研究は、こうした「カストリ雑誌」を、文芸、美術、デザイン、工芸、建築、映画、音楽などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に調査研究するとともに、その芸術文化史的な意味を理論･批評･歴史等の視点から総合的に考察することを目的とする。また本共同研究は、本学大学院・芸術研究科・カリキュラムに〈プロジェクト研究〉研究課題として組み込まれ、教員・院生が一体となって研究するという新しい教育研究方法の試みであると共に、研究の経過ならびに成果を同時に学内外に向けて積極的に情報発信するものである。

そのために教員（10名）と大学院生（修士課程12名、博士課程6名）からなるプロジェクトチームが組織され、毎週金曜日5時限に研究会（研究テーマ別研究会と全体研究会）が開かれた。そして、次の三つの見地からカストリ雑誌の調査・研究を進めた。

1）、週刊読物誌、風俗誌などにおける「カストリ雑誌」の在り様や、文芸誌、一般文化誌などと「カストリ雑誌」との関係を調査研究し、さらにはこれらに掲載された文芸作品や挿絵を調査研究し、占領下における芸術家たちの活動を考察した。

2）、音楽・舞踏・演劇・映画に関する雑誌群における「カストリ雑誌」の在り様について調査研究し、占領期の大衆文化の実相について考察を深めた。

3）、美術・工芸・建築・写真・デザインに関する専門雑誌群と「カストリ雑誌」との関係を調査研究し、占領期の美術とデザインの動向について考察を深めた。

その際に上記いずれの場合にも、米国メリーランド大学所蔵「プランゲ文庫雑誌コレクション」（1945～49年に日本で出版されたほぼ全ての雑誌を収録）マイクロ・フィッシュ版の「一般誌部門、芸術・言語・文学部門、小冊子分類70番」（本学図書館所蔵）と、初年度と2年度に購入したカストリ雑誌関係書誌（20冊）およびカストリ雑誌（949冊）の調査・研究を深めた。さらにその周辺雑誌を含むカストリ雑誌（492冊）と関連資料を調査し購入するとともに、「カストリ雑誌」研究のデーター・ベースの構築をさらに推進した。そしてその成果の一端を、

大阪芸術大学図書館所蔵品展「終戦直後の大衆雑誌〈カストリ雑誌〉と装丁デザイン―山名文夫と河野鷹思の表紙・扉・挿絵を中心にして―」（平成20年1月9日－1月30日）において報告した。

さらには本年度の研究成果に関して、以下の研究グループ課題に基づいて、研究報告書を作成した。

（1）山縣グループ　1、戦後民主主義とカストリ雑誌
　　2、カストリ雑誌に見られる性表現の諸相
　　3、戦時文化と戦後文化
　　4、カストリ雑誌の社会文化史的位置
（2）長谷川グループ　1、カストリ雑誌と出版・編集
（3）藪グループ　1、カストリ雑誌におけるタイポグラフィック・デザインの変容
　　2、カストリ雑誌の表紙デザイン
　　3、カストリ雑誌の書誌一覧
（4）田中グループ　1、カストリ雑誌の挿絵
　　2、カストリ雑誌における外国文化の受容
（5）松井グループ　1、現代版カストリ雑誌の制作
　　2、カストリ雑誌とファッション
（6）相羽グループ　1、カストリ雑誌と笑い
（7）井関グループ　1、カストリ雑誌における広告とその表現法
（8）豊原グループ　1、カストリ雑誌における映画・写真
（9）出口グループ　1、カストリ雑誌における演劇
（10）月溪グループ　1、音楽関係の問題